

(3) L-2(測線No.58、施工後約2年10ヵ月)の状況

低潮帯と中潮帯では石積み部における付着性動物の種類数が増え、高潮帯では施工前の優占種であったイワフジツボやタマキビガイが確認されるようになった。中潮帯ではマガキの被度は70%程度であった。



中潮帯の石表面に高被度で付着するマガキ

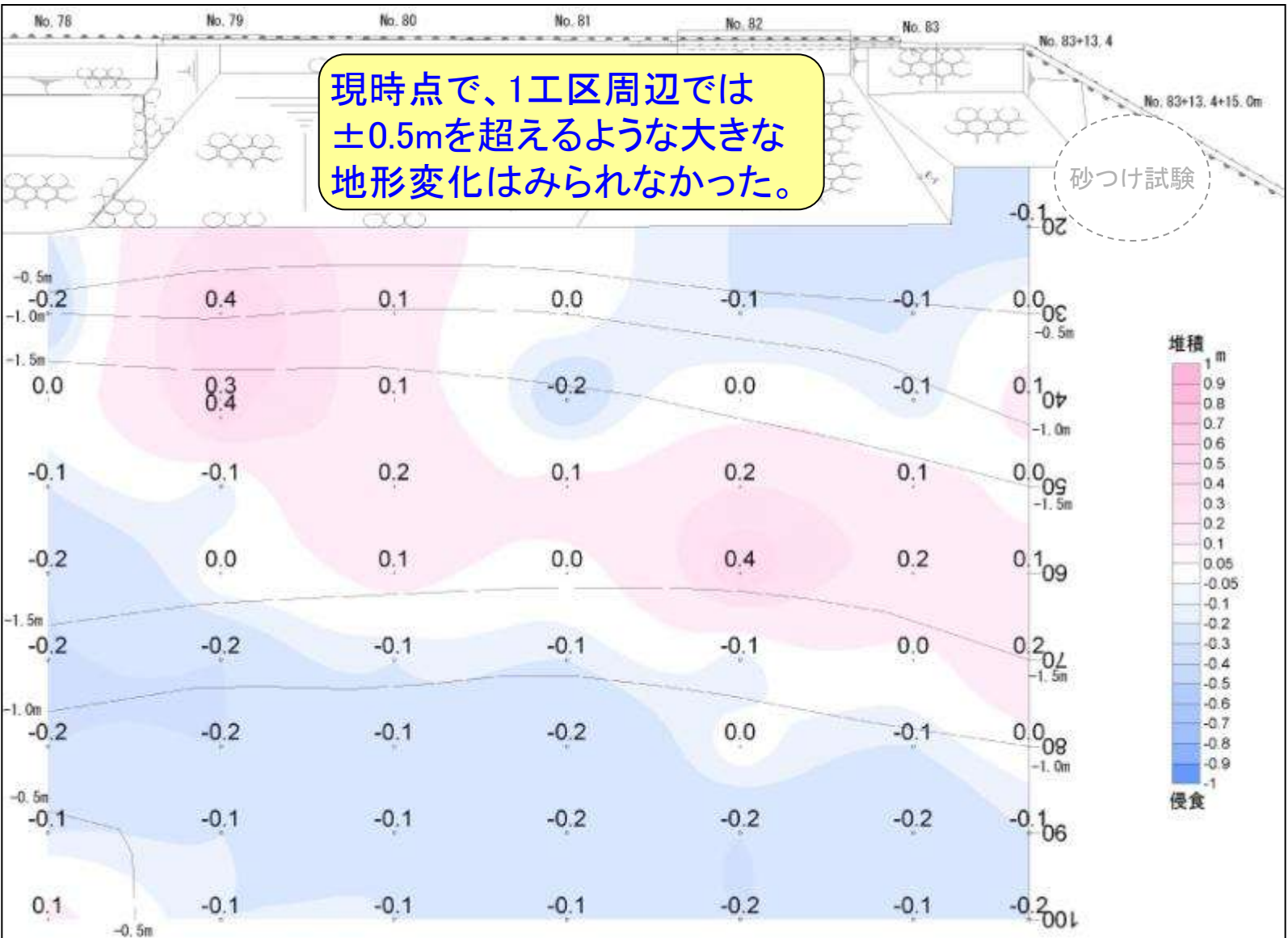
高潮帯の石表面には、イワフジツボ、タマキビガイ、マガキが確認された。



低潮帯付近では、マガキ、スジエビ属、ケフサイソガニおよび魚類のチチブ属などが確認された

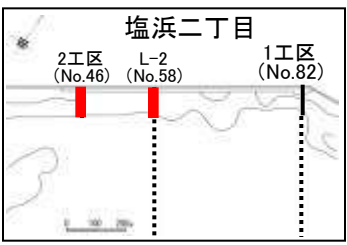
資料-3. 地形調査結果関連図表

1工区周辺域の面的な海底地形の変化 平成18年3月(施工前)と平成23年4月(施工後約4年8ヵ月)の比較

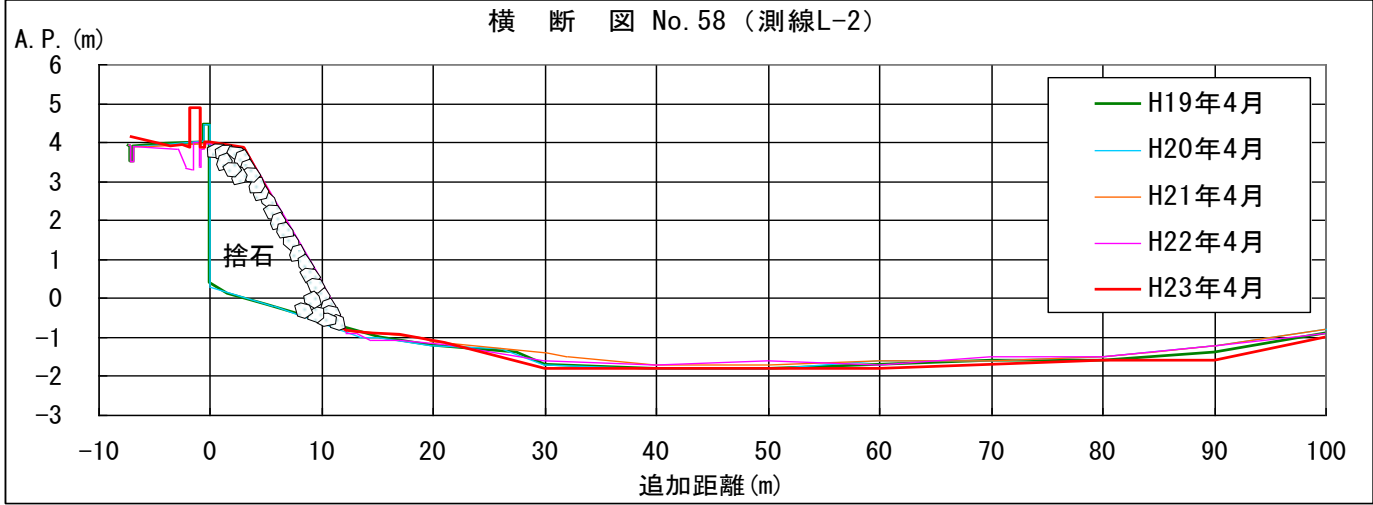


※H23年4月測量の結果は、地震による市川海岸一帯(全体)で沈下した量は考慮していない。

地形調査 施工前後の横断形状(L-2、2工区)

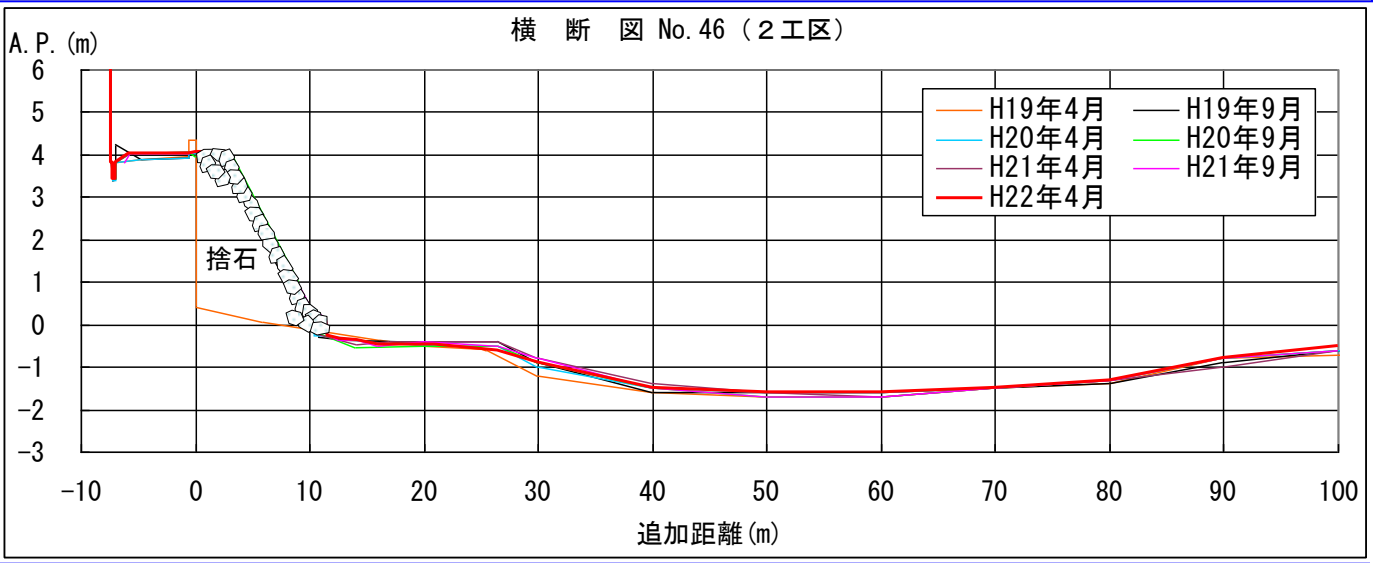


測線L-2 (測線No.58)



H20年6月に捨石(中詰め)が施工された。追加距離30mおよび90m付近で地盤の低下傾向が見られるが、著しい地形変化や一定の傾向はみられない。

2工区 (測線No.46)

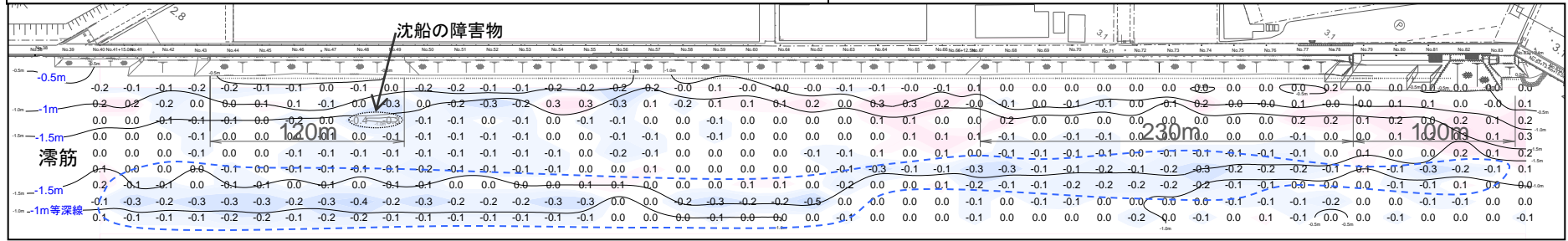


H19年度に捨石が施工された。H22年9月の測量結果と比べると、沖合100m区間にわたって、わずかに地盤が低下しているが、ここでも著しい地形変化はみられない。

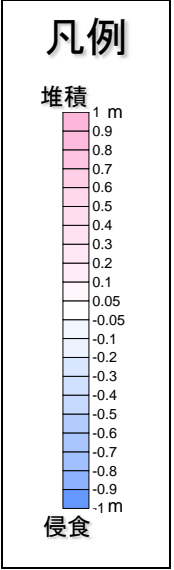
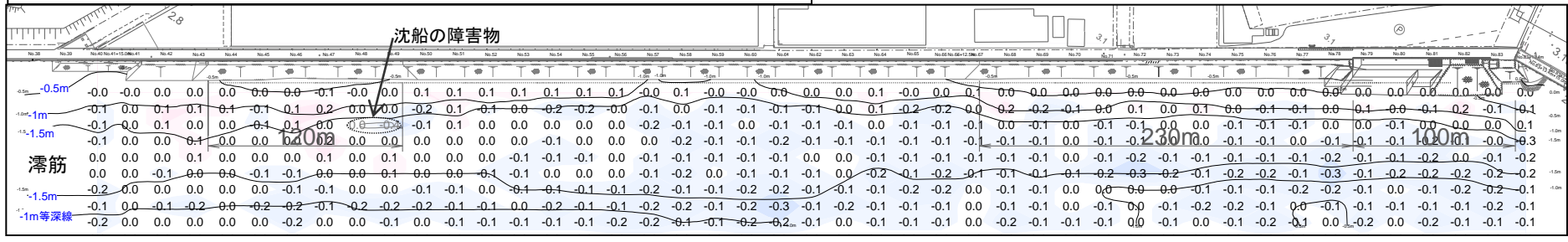
※H23年4月測量の結果は、地震による市川海岸一帯(全体)で沈下した量は考慮していない。

護岸改修範囲前面の地盤高変化の状況

H22年9月とH23年4月(今回)の地盤高変化の分布



参考: H22年4月とH22年9月の地盤高変化の分布

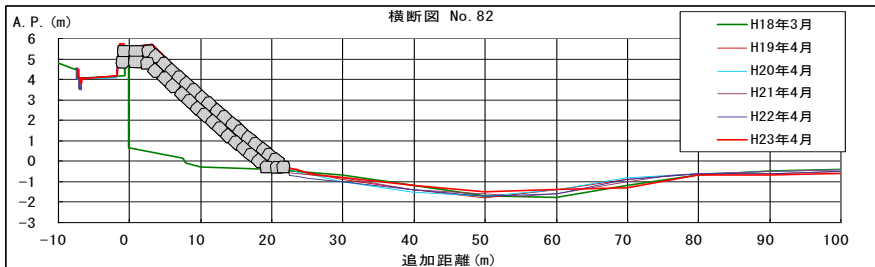
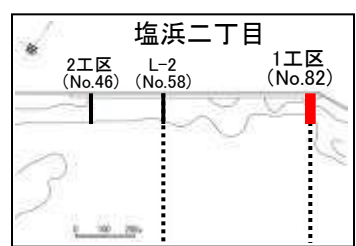


滞筋沖合側の水深-1~-1.5mで中心に、20~30cm程度の地盤高低下の範囲がみられる。
この傾向は、前々回H22年4月と前回H22年9月の地盤高変化でも同様にみられている。

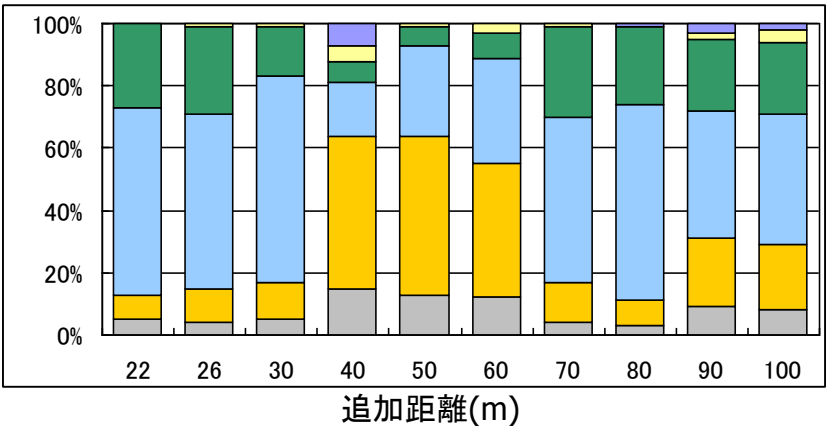
資料-4. 底質(粒度組成)

調査結果関連図表

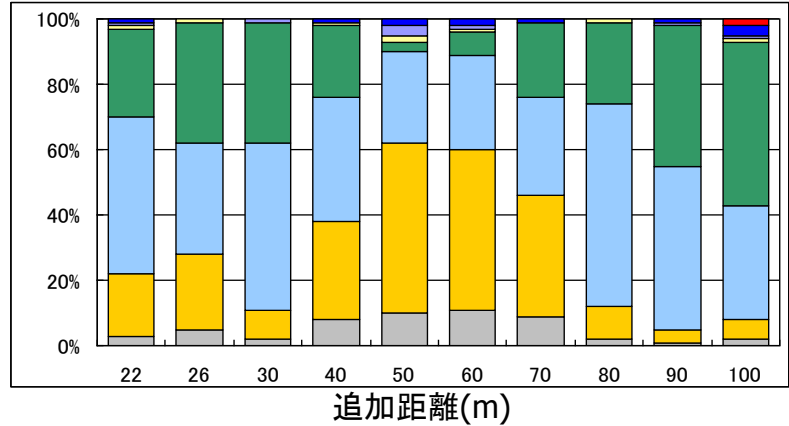
1工区(測線No.82)



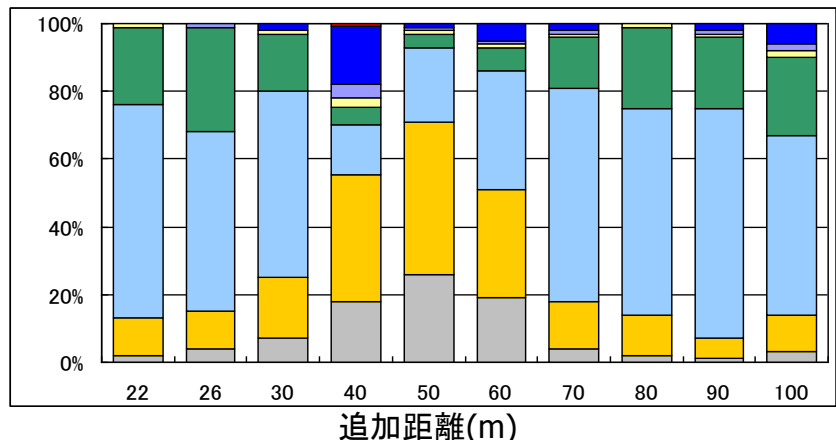
施工前:平成18年4月



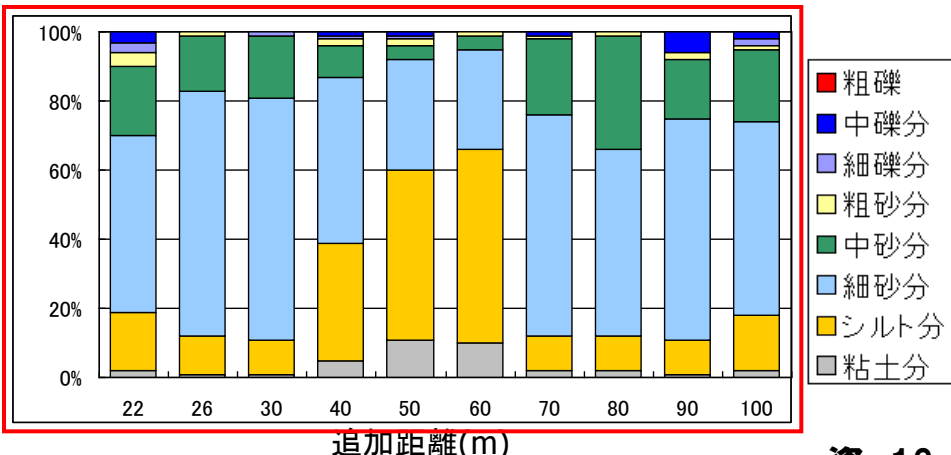
施工後約3年8ヵ月:平成22年4月



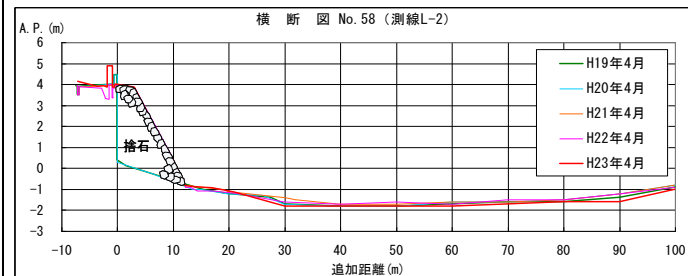
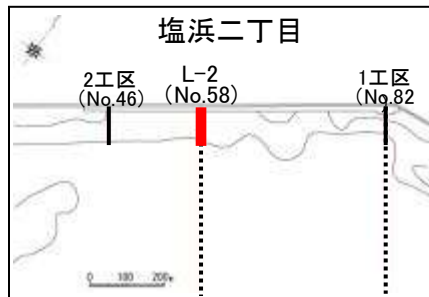
施工後約1年8ヵ月:平成20年4月



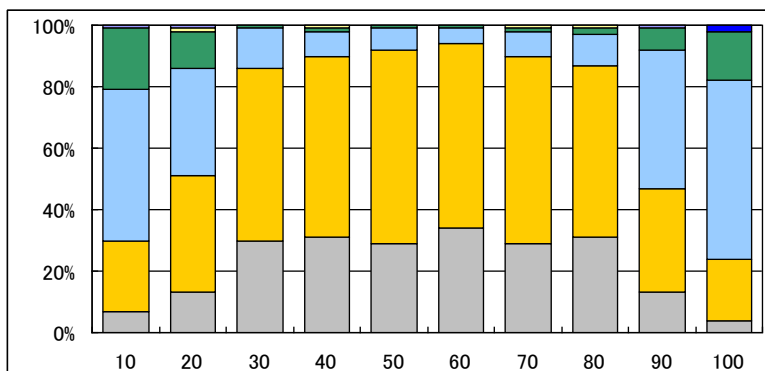
施工後約4年8ヵ月:平成23年4月



測線L-2 (測線No.58)

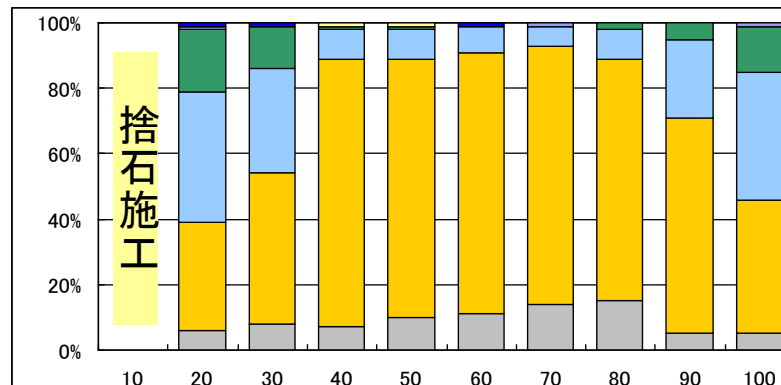


施工前：平成20年4月



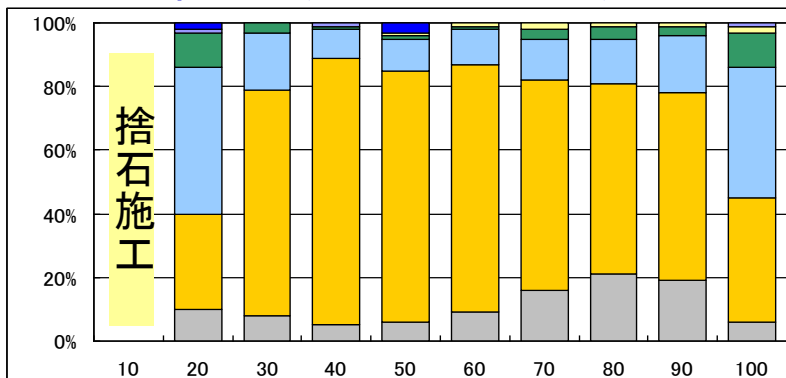
追加距離(m)

施工後約1年10ヵ月：平成22年4月



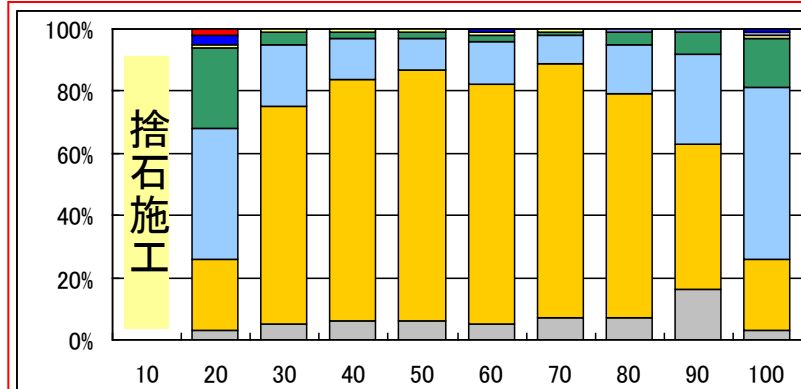
追加距離(m)

施工後約10ヵ月：平成21年4月



追加距離(m)

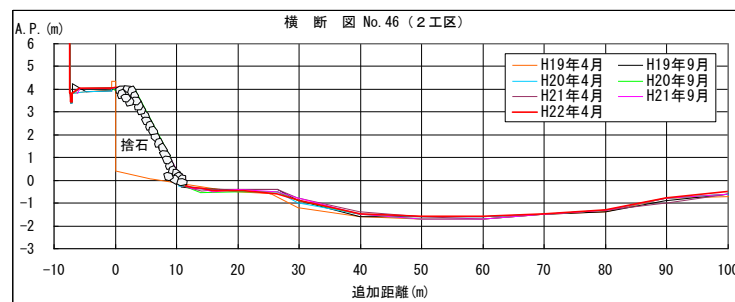
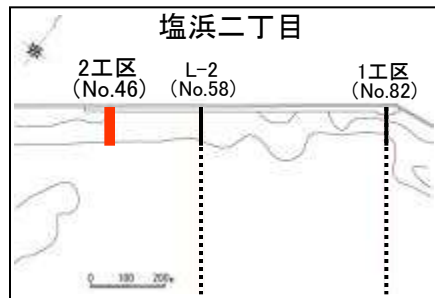
施工後約2年10ヵ月：平成23年4月



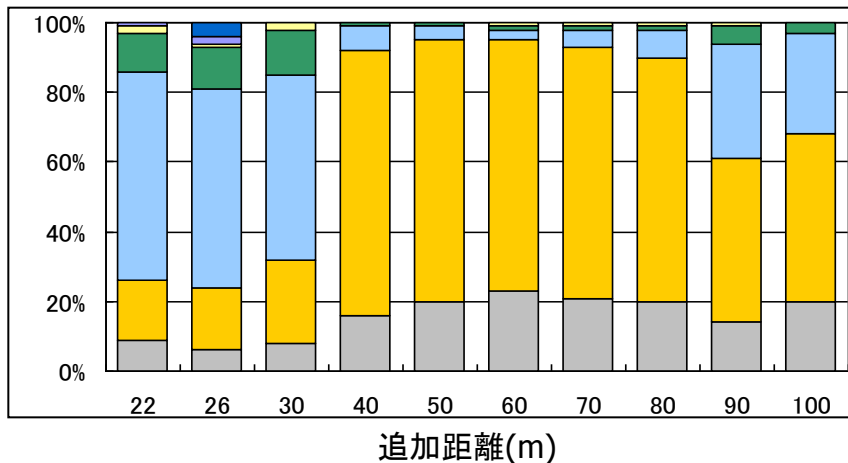
追加距離(m)

- 粗礫
- 中礫分
- 細礫分
- 粗砂分
- 中砂分
- 細砂分
- シルト分
- 粘土分

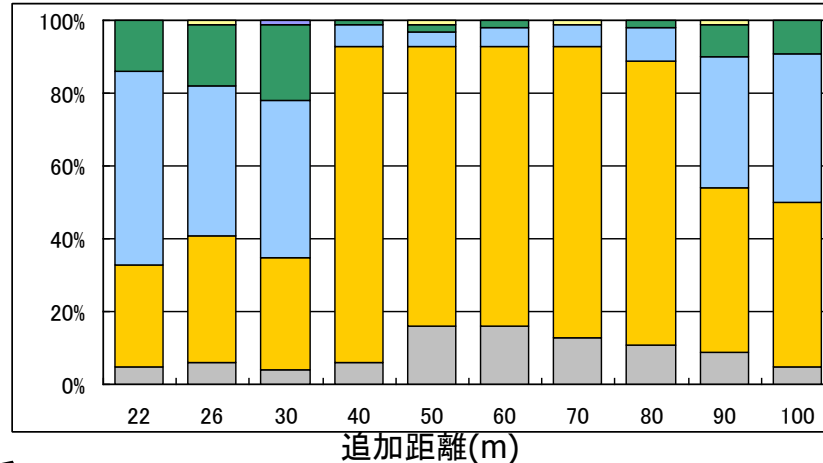
2工区 (測線No.46)



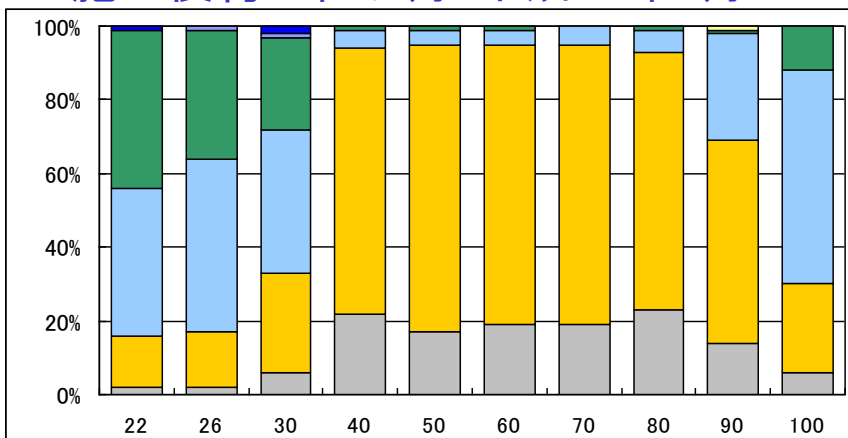
施工前：平成19年4月



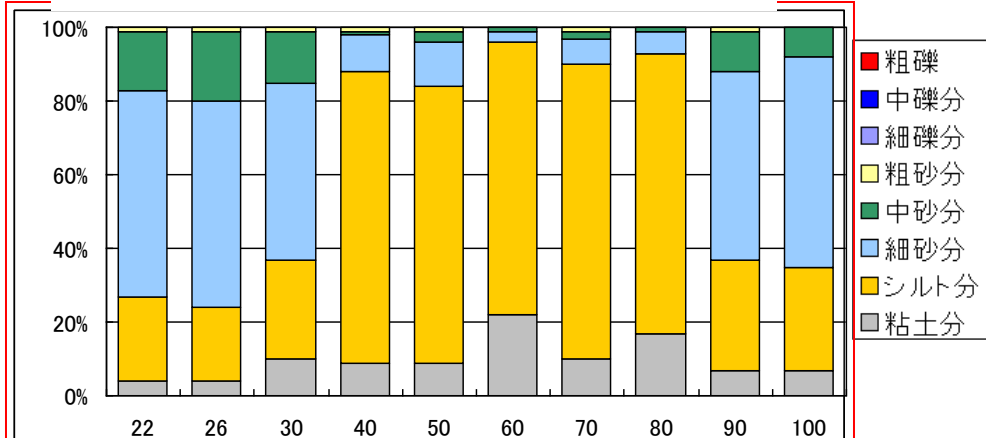
施工後約2年8ヵ月：平成22年4月



施工後約1年8ヵ月：平成21年4月

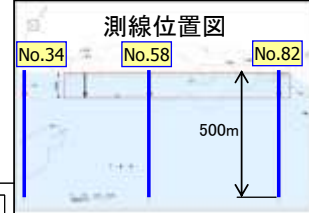


施工後約3年8ヵ月：平成23年4月

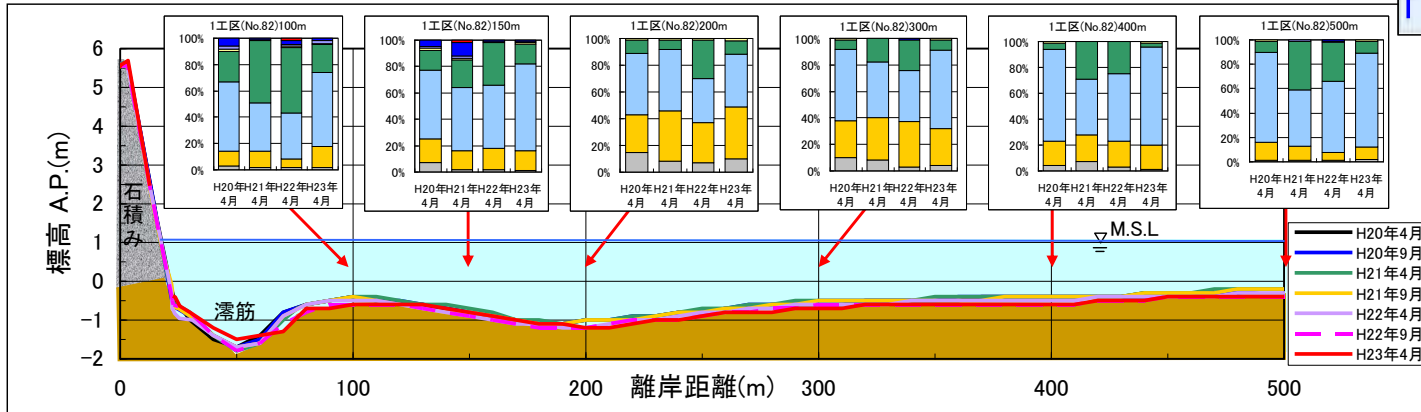


- 粗礫
- 中礫分
- 細礫分
- 粗砂分
- 中砂分
- 細砂分
- シルト分
- 粘土分

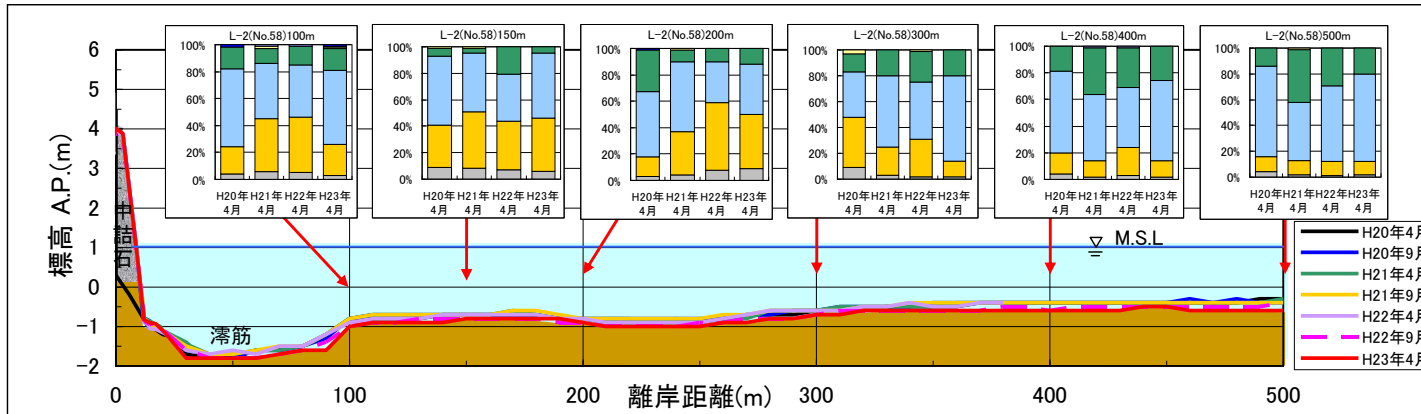
資料-5. 沖合500m区間の地形と粒度組成の変化



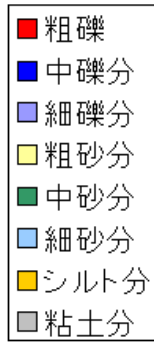
No.82
1工区沖



No.58
測線
L-2沖



粒度組成



No.34
対照測線
L-3沖

